

家庭裁判所調査官 三浦 克文さん



今回のOB紹介は家庭裁判所調査官の三浦克文さんです。

三浦克文さん

平成五年度入学生、総合科学部情報行動科学プログラム（現行動科学プログラム）を卒業後、二度目の家庭裁判所調査官補I種試験で合格、調査官となる。現在は福山家庭裁判所に勤務。

心理系専門職なので、行動科学プログラムの人は特に必見！

カウンセリングはただ聴くだけ。

でもそれが難しい。

職業

Q. 家庭裁判所調査官とはどのようなお仕事ですか？

まず、簡単に説明すると、家裁調査官というのは、裁判官の命令を受けて当事者に面接して報告書を作るのが主な仕事になります。

家裁で取り扱う事件は、大きく分けて少年事件と家事事件があります。少年事件では、その少年が事件を起こした動機や背景を探るため、少年や家族、教師や雇い主と面接し、どんな処分が妥当かという意見を具申します。家事事件は、離婚や成年後見、遺産分割といった家庭に関する

意見はほぼそのまま採用されることが多いです。だから責任はかなり大きいと言えますね。

なぜ家裁だけに調査官がいるかというと、成人と未成年では裁判をする目的が違う、ということなんです。まず、建前としては、少年事件では刑罰を与えて懲らしめるのではなく、その少年が二度と犯罪をしないために必要な教育的措置をとることが前提です。だからカウンセリングなどの技法を使って、その少年が抱えている悩みや葛藤、問題点などを明らかにする必要があるわけなんです。

大人の場合だと、こういう犯罪にはこういう刑罰を与えましょうと法律で決められているので、大人の裁判ではその犯罪をしたのかどうか、したとすれば、犯罪によって招いた被害の程度に対してどの程度の刑罰にするのかを判例

Q. 調査官の判断によって実際の刑の重さが変わるといことですか？

結論から言うと、調査官の

OB紹介

の中から選択することになります。だからはっきり言えば、事件の背景や家庭環境はあまり重視されないのですね。

家事事件で言うと、全くの他人同士の争いであれば法律論だけの問題ですが、家族親族内の争い事は色々な感情が入り乱れるので法律だけでは割り切れないところもあります。だから、心理学などの専門知識を持った調査官が間に入って、感情的になっている人たちに色々な働きかけをするなど、うまく解決できるよう調整するわけです。

Q. 何か特別な資格はありますか？

調査官になるために必要な資格は特になく、家庭裁判所調査官補一種試験に合格すれば調査官になることができます。

す。その試験は年齢制限があるのですが、心理学や社会学の専門知識を問う試験なので、大学である程度勉強しておく必要があるでしょう。

合格後は、より専門的な知識を身につけるため二年間研修所で研修を積むことになり、その後も定期的に研修を受けていきます。

Q. 法律は知らなくても大丈夫なのですか？

大丈夫です。調査官の仕事では一部の法律だけ知っていれば良いので、基本的には入ってから受ける研修だけで十分ですよ。私も他の法律は全くと言っていいほど知りません。そもそも法律の専門家は裁判官と書記官なので、法律の問題は彼らに任せておくこととなります。

仕事談

Q. 人の心にかかわる仕事というのは精神的にきつくなったりしませんか？

確かに、なりたての頃はなんとか力になってあげたい、解決してあげたいという気持ちが強かった分、うまくいかない時はつらかったですね。無力感なんかを感じて。でも、次第に、自分がその人のためにできることはあまりないのだと自覚し始めてからは、それほど負担に感じないようにはなりました。

カウンセリングは、話を聴くだけというのが原則です。傾聴や非指示的面接などという言い方をするのですが、ただ話を聴くだけと言ってもこれが難しいですね。いろいろな事情を聞いてアドバイスしなくてはならないところ

えて傾聴に徹する。そうすることで、この人は説教せずに話を聴いてくれる、この人だったらつい悩みを話したくなる、と思ってもらえるようになる、とって行く。カウンセリングの訓練というのは話を聴く訓練なのです。

そうすると、人は話をしていくうちに、勝手に解決策を見つけてしまいます。「気づき」という言葉が用いられるのですが、その「気づき」が出てくるまで、批判もせずアドバイスもせず聴き続ける。何か特別なことをしているわけではない、ただ聴いているだけ。だから、自分したいことはできないのだと、ある意味謙虚な気持ちを持ってるようになっています。自然とつらさは減ってきましたね。

家庭裁判所調査官 三浦 克文さん

Q. なぜこのお仕事を選ばれたのですか？

大学二年生の時までは本当に何も考えていなくて、兄が研究者を目指していた影響もあって、漠然と大学院に行こうかなというくらいにしか考えていなかったですね。

ところが三年生になって研究室に配属されて、いろいろと勉強を本格的にやるようになりしました。それはそれで面白いと思っていたのですが、そのまま研究者になるよりは、心理系の仕事に就いて実践の中で人の心理を勉強したいなと思うようになりしました。ちょうどそのころゼミの先輩が調査官の試験を受けていた話を聞いて興味を持つようになりしました。

そして、中学校の教員をやっていた父にその話を何気なく話したところ、父が、生徒が起こした事件で知り合っ

た調査官の話をしてくれました。

それは、学校に火をつけて放火事件を起こしてしまったある知的障害の子どもの話です。その時担当した調査官は熱心に関わってくれて、父と一緒に家庭訪問をすることにしました。そこは車でないと行けないような田舎だったそうです。

家庭訪問が終わって、一緒に車で帰ろうとしたところ、その調査官はそれを断って歩いて帰ると言い出しました。父は、歩いたら何時間もかかりますよと止めたのですが、調査官はその子がどんな気持ちでどんな思いをしながら学校に通っていたのか、同じ道を歩きながら考えていきますと言って歩いて行ったということです。

この話を聞いて、ああこんな人たちがいる職場がある、マンガやドラマの話だけじゃ

ないと感動して、絶対に調査官になりたいと思ったわけです。

学生時代

Q. 行動科学プログラムは大変だという話を聞きますが？

確かに行動系はレポートが大変で毎週必死でした。なんで行動系だけこんな思いをしなきゃいけないのかと思っていましたし。

しかし、今から思うとどうせ暇でもレポートを書くのは締め切りぎりぎりです、結果的に慌てたのは一緒だと思えますよ。むしろ、大変なことでも仲間内の団結力は高まり、文章力やプレゼン力もかなり鍛えられたので、行動系でよかったなと思っています。

私の同期には東大京大、早



三浦さんが勤務されている福山家庭裁判所

慶といった有名大学出身者が多いのですが、入ってみて一緒に研修を受けてみると、えっ、このレベルなのって逆にびっくりすることもありました。行動系は確かにかなり厳しかったです、それだけ高い水準の教育を受けられたと実感しています。

OB紹介

仕事と勉強

Q. 総科で学んだということは今の仕事にどう活かされましたか？

まだ、就職して十年程度なので、今の段階でという前提で答えるとすると、まず行動系で学んだことについては、私の場合は心理系の技術職なので、やはり専門の知識や研究方法はダイレクトに活かされていますね。

後は、先ほども言いましたが、文章力やプレゼン力です。裁判所なので、いくらい面接ができて、少年を更生させたという手ごたえを感じても、それを書面や口頭で超多忙な裁判官に伝えられないと意味がないからです。毎週のレポートや、研究発表会は当時の私にはつらかったです。今から思うと鍛えられて

よかったですと思います。

総科全体のことでは、家裁調査官の仕事は心理ばかりでなく、法律や福祉や社会学の分野などの知識も必要になるので、他のプログラムの授業を受けることができたのも役に立ったかなと思います。当時の授業内容を覚えていて役に立ったというわけではないですが、一度少しでも触れておくことで、後からやる時に取っ付きやすいことであるんじゃないですか。そんな



な感じですね。

後は、やはり同級生との付き合いの中で、自分の専門外の分野の人たちと付き合いえたというところでしょうか。特に、理系の職種の人たちなんて、普通の教育学部や文学部の心理学科にいても接することはほとんどなかったと思うので、総科の行動系で良かったと思います。

まだ他にもたくさんあると思うのですが、今考えてみて思いつくのはこんなところですね。

学生へ一言

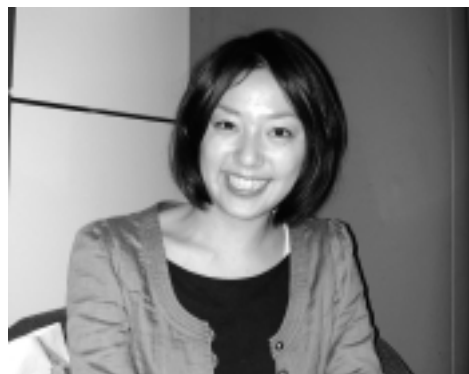
しいてあげるとすると、総科でかたまりすぎずに、色々な人たちの付き合いを大切にしてほしいということです。かね。

オリキャンのインパクトが

すごく強いので、どうしてもその後も総科生でまとまりすぎるところがあるのですが、社会に出たら、どんな職場でも人とうまく付き合いえないと仕事に大きく影響しますからね。バイトでもいいし、サークルでもいいから、いろんな年代の人たちと付き合い合っていつてほしいと思います。

(担当 19生 平島 あゆみ)

JTB中国四国営業部 新中 裕子さん



今回のOG紹介はJTB中国四国、営業部で働く新中裕子さんです。

新中 裕子さん
平成十五年度入学、地域科学（現 地域文化）プログラムで日本文化について学ぶ。平成十九年に卒業し、JTB中国四国に就職。営業部で働く。

悩み迷った就活談や就職一年目のフレッシュな仕事話は特に必見！

職業

Q. どのようなお仕事ですか？

JTBが分社化して、地域単位の会社になった、JTB中国四国本社の営業部で働いています。中国四国内の店舗をまとめる部署で、各社の実績の分析や営業方針を決めていくことが仕事です。また、キャンペーンを決めたり行ったり、そのためのツール、チラシやポスター等の準備もします。営業部は、法人営業と個人店頭営業の二つに分かれます。私は、一般のお客様がカウンターに行つて旅行を申し込むような、個人店頭営業のスタッフを支援しています。

Q. 支援は具体的にどういうことをなさるんですか？

私は四月（二〇〇七年）に入社して、店頭を経験していません。だから店頭スタッフを支援するということ、難しいことが多いですが、販売促進のための情報やシステム変更や改善の情報を店頭スタッフに発信しています。先ほど述べたキャンペーンのツールの配布もしています。

Q. キャンペーンも企画されるんですか？

中国四国域内だけで行うキャンペーンは、この部署で決めていきます。すぐクリエイティブというか、自分が良いと思う提案をしていけば、それを本当に実現できる部署なので恵まれていると思います。だからその分、勉強

もしないといけないです。

まだ半年なので、企画などまではできていないんですが、企画は自分から立ち上げなさいという雰囲気があるんです。新入社員だからこそ新しい意見、新鮮な意見を挙げてほしいと言われてますね。

Q. 今までを振り返ってみてどうですか？

必死だったかな。やっぱりもう甘えが許されないというか。大学生の時とすごく差がありました。生活自体も朝きちんと起きて行かないといけないですし（笑）、まずそこから。生活に慣れるのに必死でしたが、今はだいぶ落ち着いてきたかなと思います。

Q. 仕事は慣れてきましたか？

私の部署の仕事は、すごく広い範囲のことをしないといけないので、初めての仕事ばかりで日々勉強です。先輩もそれを言うんです。自分も、毎日毎日、新しいことばかりで、だからそれについていけないといけないし、それを理解して支店に伝えないといけない立場なので、勉強が欠かせないですね。

就職活動

Q. この会社を選んだ理由、きっかけ、時期などを教えてください

本当に反面教師にして頂きたいと思うんですけど、就職活動をほとんどしていないんですよ。企業が自分にあまり

合わないのではないかと思っていたことと、学校で勉強していたことが文化に関わることだったので、財団法人、例えば、広島文化財団といったところで働けたらいいなと思っていました。

◆希望の職種から始まり迷いはじめ……

ただそうした職業はなかなか採用も少ないので、企業を受けてみようと思いついて、周囲の就職活動の波に乗ってとりあえず少しやってみました。二月頃になって、会社説明会などに行き、出版社を一社受けました。ですが、私はやっぱり企業に向いてないなと思って、企業への就職はやめようと思ったり、大学院で勉強したいという気持ちもあったので大学院に行こうかなと思ったり、ふらふらして、迷っていました。何がしたいのかよくわからなくて。

公務員採用試験も受けました。みんな一年前くらいから公務員セミナーや予備校などに行ったりして、準備するじゃないですか。でも私は市役所の試験の一ヶ月前に受けようと思いついて、一ヶ月ちょっと勉強して受けました。当然、

甘くはなくて落ち、どうしようかなと。でも公務員もだめで就職もなかったら、もう留年してもいいと思つていましたし、ピースボート(国際交流を目指すNGO、船で世界を回る)にすごく行きたかったんで、乗ってしまおうと考えたりしていました。

◆迷っていたところJTB求人が……

そういうことを考えている時にJTBの求人がありました。旅行は好きですし、自分に関わっていくとしたら楽しい、店頭に来る人は自分の楽しみなことで来るので、それ

に携わっていいことはすごく幸せだなと思いました。以前から広い世界を見たいと思つていて、その割に度胸がないんですが、そうしたお手伝いができることはすごく良いと思いついて、JTBに決めました。

◆四年間で自分のしたいことを探す

就職活動は参考にならないですね。本当にふらふらして、あつちにいったり、こっちにいったり。なかなか自分のやりたいことがわからなくて。大学に入った時は就職のことまで見越していませんでした。大学でこれを勉強しようみたいな感じで入学して、その向こう側に何も見えなかったというか。四年の間に何かやりたいことなどを見つけてるべきだったんだけど、私はそれができなくて、だからふらふらしてしまつたんですね。

JTB中国四国営業部 新中 裕子さん

仕事談

Q. そうして会社に入ってから感じたことや戸惑ったことはありますか？

◆責任

ありきたりなことですが、新入社員だからといって許されないことややはりあるというか、その辺は厳しいですね。バイトをしていると、少し自分も社会に出ているような気になっていたんですが、バイトにもありますけど、やはり責任が違うように感じています。

◆必要以上の甘さはない

入社式の初日から、「じゃあここデスクね」、「電話鳴ったら、出てね」みたいな感じで(笑)。ちゃんと研修をして職場に入るところもあります。私が、私たちはたまたま、研修の順番もあり、先に本社に入

りました。その二週間後に、研修に行ったのかな。だからといって教えてくれないという

ことではなくて、教えて下さるんですけど、必要以上の甘さはないように思います。これをやってといわれたら、やり方は知らなくても、とりあえず自分でやらなければいけません。わからないことは自分から聞くか調べます。といってもわからないことしかなかったんですけど。結果的に自分が間違った情報を発信したとしたら、それは自分の責任になります。

放任されているのではなく、上司の方にちゃんと面倒を見て頂いていて、大切なところはきちんとチェックして頂いています。しかしなんでも自分の責任はやっぱり果たさないといけない。それはすごく感じていきますね。

学生時代

Q. 地域科学プログラムで思っている授業などはい出に残っている授業などありますか？

地域科学プログラムの授業はとても面白かったですね。

私は日本文化を勉強しようと思っていましたけど、他分野の佐藤先生の授業なども、すごく面白かったです。

日本文化の分野でいえば、例えば、三年生の時に実習に行く授業がありました。浅野先生という地理の先生の授業で、愛媛県宇和島市の段々畑の広がるところに行つたことはすごく面白かったですね。歴史上の偉い人じゃなくて、一般の人の生活が段々畑などに残っているんです。私はまさにそういう民俗学に興味があったんです。それに段々畑を守る会のおじいさん

達など、地元の人たちのかざらない性格にも魅かれて、印象的でしたね。

あと、私の卒論を担当して頂いた、日本史の佐竹先生もすごく知識が深くって、面白かったです。当たり前ですが、大学の先生って、本当に知識が深いでしょう。そういう先生の話を聞けることはとても幸せだと思います。大学へ入って、毎日過ごしていると、当たり前のような気がしますが、今考えたらすごく貴重なことだと思えます。その佐竹先生の「地域の環境史」は、自然と人の昔からの生活を見直すような勉強で面白かったです。その授業を受けて、佐竹先生に卒論の担当になってもらおうと思えました。

仕事と勉強

Q. 地域科学プログラムで楽しんでたくさん勉強されたようですが、仕事とはどのようなつながっていますか？

まず総合科学という考え方は、活かされていると思いません。様々な角度からの視点を意識したり、いろんなことに興味を持つように心がけたり、これは総合科学部で勉強

しておかげだと思えます。卒論のテーマと仕事は、直接は結びつかないですね。私が勉強した人と自然の関係

は、「昔は良かった」という感じになりがちですが、昔の大変な苦勞をなくすために、今

の生活を作りあげてきたわけ

です。というのは、先生の受け売りなんですが(笑)。昔と

今は連続しているもののはず

だから、民俗は今の時代にも

あります。観光という面で言

えば、今の生活や民俗を支

援、活性化させるということ

で、すごく遠回りだけど、勉強したことを踏まえて貢献でき

るかなと思います。

◆勉強したことを大切に

でもそれは、なかなか難しい

かな。だからどちらかというと直接仕事に結びつくとい

うより、旅行会社に身を置き

ながら、勉強したことを頭に入

れておくような気持ちのほうが強い

です。活かすと言うよりは、勉強したことを大切

にしたいですね。でもそういう勉強をしたことは、観光に携

わっていく会社ですし、やはり

すごく大きかったと思います。

だから仕事に活かせなくても

もプライベートでもやっぱり、

今まで勉強したことなどに興味

を持ち続けていきたい

し、仕事じゃなくてもそういう

ことに携わっていったらと思

います。

学生生活では、出会いを大切

にしてほしいと思います。

人との出会いも、本などの出

会いもそうですが、出会い

によって自分の視野も世界も

広がると思います。私の学生

生活で誇れることといえば、

尊敬できる先生や友人との出

会いに恵まれたことだと感じ

ています。

進路を決める上では、自分で決

めるということが大切なか

なかなと思います。最終的な

決断を自分ですることで、誰

のせいにもできないから、い

い意味で逃げ道がなくなっ

て、くじけそうな時も踏ん張

れるのかなと思います。

学生へ一言

学生生活では、出会いを大切

にしてほしいと思います。

人との出会いも、本などの出

会いもそうですが、出会い

によって自分の視野も世界も

広がると思います。私の学生

生活で誇れることといえば、

尊敬できる先生や友人との出

会いに恵まれたことだと感じ

ています。

進路を決める上では、自分で決

めるということが大切なか

なかなと思います。最終的な決断を自分ですることで、誰のせいにもできないから、いい意味で逃げ道がなくなっ

て、くじけそうな時も踏ん張れるのかなと思います。

後輩と言っても、広大生の活躍を見たり聞いたりすると、とても励まされます。大学の間にこういうこともでき

たんだなと思って、自分はその

らりくらしすごしたなあって

反省することもあります。私

も広大生に負けないよう頑張

らないといけないですね。

仕事に活かせなくてもプライベートでもやっぱり、
今まで勉強したことなどに興味を持ち続けていきたい

(担当) 18生 荒川 洸一

(取材協力) 19生 桑田 雅美